

法の一分也。云にかひ無き仏教の小乘阿含經にも（及ばず）、況や通・別・円をや。況や法華經に及べしや。かゝる淺事だにも成ぜんとすれば四魔競て成じがたし。何況法華經の極理南無妙法蓮華經の七字を、始て持たん日本國の弘通の始ならん人の、弟子檀那とならん人人の大難の來らん事をば、言をもて尽し難し。心をもてをしはかるべしや。

されば天台大師の摩訶止觀と申文は天台一期の大事、一代聖教の肝心ぞかし。仏法漢土に渡りて五百余年、南北の十師、智は日月に齊く、徳は四海に響きしかども、いまだ一代聖教の淺深・勝劣・前後・次第には迷惑してこそ候しが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給のみならず、妙法蓮華經の五字の藏の中より一念三千の如意宝珠を取出して、三国の一切衆生に普く与へ給へり。此法門は漢土に始るのみならず、月氏の論師までも明し給はぬ事也。然れば章安大師釈云、「止觀の明・靜なる前代に未だ聞かず」云云。又云、「天竺の大論尚其の類に非ず」等云云。其上摩訶止觀の第五卷の一念三千は、今一重立入たる法門ぞかし。此法門を申には必魔出來すべし。魔競はずば正法と知るべからず。第五卷云、「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る、乃至、随うべからず畏るべからず、之に随えば將に人をして惡道に向わしむ、之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云。此積は日蓮が身に當るのみならず、門家の明鏡也。謹て習伝て未來の資糧とせよ。此積に三障と申は煩惱障・業障・報障也。煩惱障と申は貪・瞋・痴等によりて障礙出來すべし。業障と申は妻子等によりて障礙出來すべし。報障と申は国主・父母等によりて障礙出來すべし。又四魔の中に天子魔と申も（是の如し）。今日本國に我も止觀を得たり、

我も止観を得たりと云人人、誰か三障四魔競へる人あるや。へ之に随えば將に人をして悪道に向わしむと申は只三惡道のみならず、人天九界を皆惡道とかけり。されば法華經をのぞいて、華嚴・阿含・方等・般若・涅槃・大日經等也。天台宗を除て余の七宗の人人は、人を惡道に向しむる獄卒也。天台宗の人人の中にも法華經を信ずるやうにて、人を爾前へやるは惡道に人をつかはす獄卒也。

今二人の人人は隱士と烈士とのごとし。一もかけなば成ずべからず。譬ば鳥の二の羽、人の兩眼の如し。又二人の御前達は此人々の檀那ぞかし、女人となる事は物に随て物を随る身也。夫たのしくば妻もさかふべし。夫盜人ならば妻も盜人なるべし。是偏に今生計の事にはあらず、世生生に影と身と、華と果と、根と葉との如くにておはするぞかし。木にすむ虫は木をはむ、水にある魚は水をくらふ。芝かるれば蘭なく、松さかうれば柏よろこぶ。草木すら（是の如し）。比翼と申鳥は身は一にて頭二あり。二の口より入る物一身を養ふ。ひほくと申魚は一目づつある故に一生が間はなる事なし。夫と妻とは（是の如し）。此法門のゆへには設ひ夫に害せらるるとも悔る事なかれ。一同して夫の心をいさめば童女が跡をつぎ、末代惡世の女人の成仏の hands と成給べし。（此の如く）おはさば設ひいかなる事ありとも、日蓮二聖・二天・十羅刹・釈迦・多宝に申て順次生に仏になしたてまつるべし。「心の師とはなるとも心を師とせざれ」とは、六波羅蜜經の文也。設ひいかなるわづらはしき事ありとも夢になして、只法華經の事のみさはぐらせ給べし。中にも日蓮が法門は古へこそ信じがたかりしが、今は前前いひをきし事既にあひぬれば、よしなく謗せし人人も悔る心あるべし。設ひこれより後に信ずる男女ありとも、各々には